(6) 句読・清濁点は、校訂者の私案にもとづくものである。

(7) 誤読のおそれある語には、典拠にもとづいて振仮名をつけることにつとめた。

一、本書の頭注は、本文校異（▽印の下に記入）のほかには、主として人名・地名・歴史的事実・難語等につき、簡略に解説（○印の下に記入）するにとどめたが、さらにその欠を補うため、補注（「⟶補」として指示）を加え、巻末附録の「補注篇」に一括して参考に供した。

一、「参考篇」には、そのほか関連文献中から池亭記（全）・源家長日記（抄）・十訓抄（抄）・吾妻鏡（抄）等を収め、さらに平安京略図・大内裏略図・京都附近地図・河合神職鴨県主系図（抄）等をあわせて附録とした。

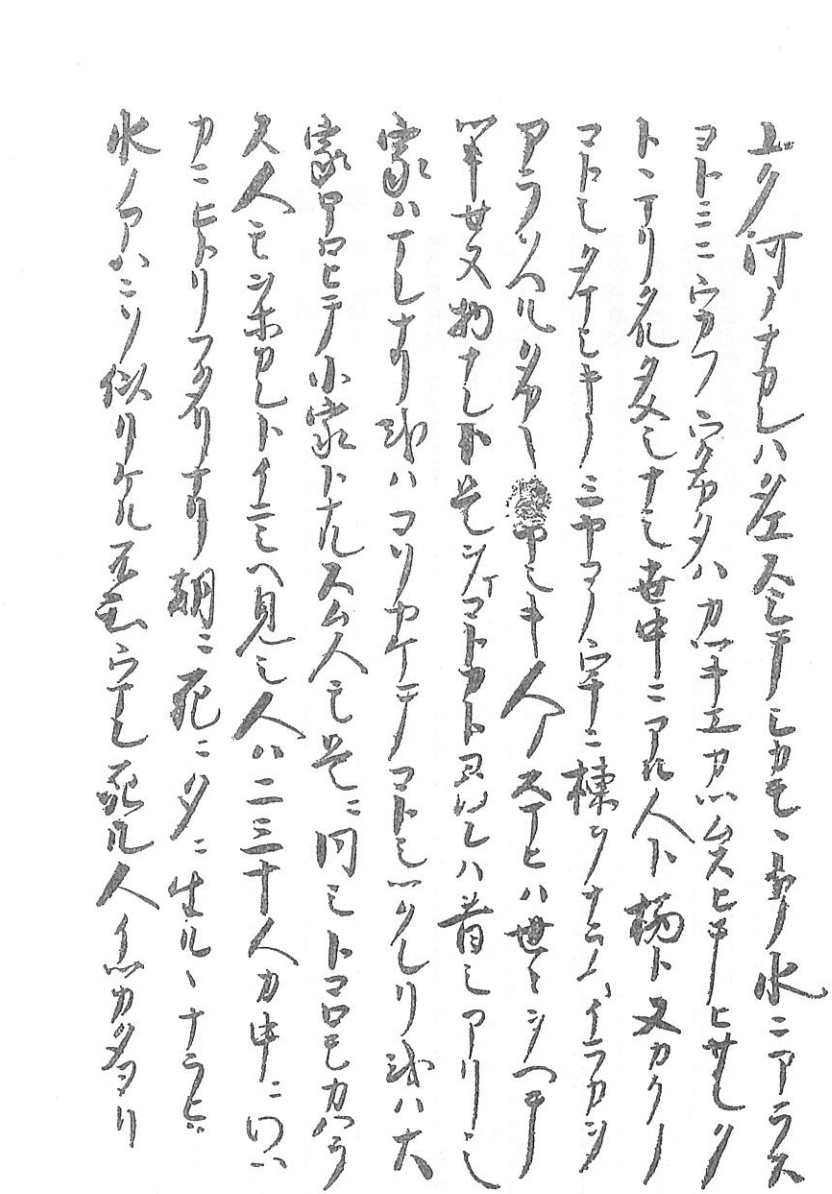
一、本書の校注においては、先学諸賢の研究に負うところが多大であったが、なお不備の点が少なくないであろう。示教を仰いで改訂につとめたい。また本書の校注には、阪本千秋氏の助力をえたところが少なくない。記して深謝の意を表するものである。

昭和五十二年十二月

永積安明

目　次

凡　例……三
本　文……七
補注篇……三七
参考篇……四三
池亭記……四四
源家長日記（抄）……四九
十訓抄（抄）……五五
吾妻鏡（抄）……五七
国宝大福光寺本影印……六
平安京略図……五八
大内裏略図……五九
京都附近地図……六〇
河合神職鴨県主系図（抄）……六一



国宝大福光寺本影印

○ゆく河のながれは――「発語第一段、是此集の小序也」（方丈記流水抄）。――→補一

○よどみにうかぶうたかた――「ふりやめば跡だに見えぬうたかたの消えてはかなき世を頼むかな」（後撰集巻十三読人しらず）。「ここに消えかしこに結ぶ水の泡のうき世にめぐる身にこそありけれ」（千載集巻十九藤原公任）。――→補二

▽とどまりたるためし――とどまる事（前）（三）（鈴）

▽（い）――底本汚損して不明。（前）（三）（鈴）により補う。

▽やけて――やぶれ（三）

▽（ただ）――底本汚損して不明。（前）（三）（鈴）により補う。

○ただ水のあわにぞ――世皆不二牢固一如二水沫泡焰一」（法華経　随喜功徳品の偈）。

ゆく河のながれはたえずして、しかももとの水にあらず。よどみにうかぶうたかたは、かつきえ、かつむすびて、ひさしくとどまりたるためしなし。世の中にある人と栖（すみか）と、又かくのごとし。

たましきのみやこのうちに、棟をならべ、いらかをあらそへる、たかき（い）やしき人のすまひは、世々をへてつきせぬ物なれど、是をまことかと尋ぬれば、昔ありし家はまれなり。或（あるい）はこぞやけてことしつくれり。或は大家（おほいへ）ほろびて小家（こいへ）となる。すむ人も是に同じ。ところもかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は、二三十人が中（なか）にわづかにひとりふたりなり。朝（あした）に死に夕（ゆふべ）に生るるならひ、（ただ）水のあわにぞ似たりける。不レ知（しらず）、うまれ死ぬる人、いづかたよりきたりて、いづかたへか去る。又不レ知（しらず）、かりのやどり、たが為にか心をなやまし、なににより て